

臥牛山圖

この夏久しぶりに故里へ帰り墓参から足を伸ばして隣町の友人の寺を訪ねたのは、旧友には何の前触れもしない突然のことだったろうが、自分としては予ねてこれを計画予定の行動だった。

海岸町らしく門にも庭にも砂利がごろごろしていて、昔見馴れたこの寺の感じは、昔と言っても中学を出てからも来た覚えがあるくらいなので、少しも変わっていなかった。本堂の方へは行って行くと、真っ先に耳にしたのは旧友の声だった。ははあ居るなと思う安心と共に、こんなに十何年ぶりかで突然やって来ているがら彼の在寺にうまく逢ったのは幸運だと思えた。庭は正面から右へ曲って、一、二本の庭木と作りの石をすかして庫裡が見えた。そこに和尚が普段着の帯をときかけて、多分自分が来客として見えたために奥へはいつて着換えでもする気だろうが、そのままこちらをチラと見て奥へはいつて行った。はじめて逢う彼の妻らしい婦人がいたので、名前を言うとこちらの声をきいた和尚がまたふらりと奥から出て来た。昔ながらの顔だが大分年をとって顔色は蒼い。蒼い顔が笑っている。

「ずん分しばらくだった」

「こりや珍しい人だ」

「しばらくだった。どうだい、元気か」

「うん。まあ、おあがり」

和尚は仏壇の脇にある座敷へ招いた。さつきからふらりふらりと動くように見えていた和尚の動作は、近くで見るとひどく体がものう懶いためだと判った。顔色とそれとで自分はずぐ和尚が相当な病気をしていることを悟った。座に坐って改めて久闊を叙してから、自分は

真っ先にそのことを訊ねた。

「肋膜をやってね」

和尚は浴衣の袖の下で腕をさすりながら言う。別に痩せている風ではない。私には昔彼が若い頃にそう言う病気をしたという記憶もない。お寺の仕事としてそれほど激しい事も普通ではありそうもない。

「どうしたんだい。きいたこともない、——と言ったって、最近のことは勿論何も知らないが」

「わたしもはじめてさ。この五月。——それで一ヶ月ばかり前にすっかりよくなったよ。そうしたらそうさ。ええ気になって本を読みすぎたらしい」

「本を読んだ？本は不可ん。本は不可ん」

自分は心の中で本を読むために熱の下がるのを止めてしまう病人が知り合いの中で一人ならずいたことを思い出して、声を大きくした。

「不可んだなあ。体を使うでないし、ただ読むだけだが、不可んだなあ」

和尚は頭を傾けて感じたように言った。こう言うところに、昔の友の面影の上に加わった寺の和尚らしい様子が滲み出ていた。

自分は和尚に横になるようにすすめながら、亡父の墓参に来て立ち寄った話をした。それから今は他人の手に渡っている生家の前を通って見ると生家の姿が思いもかけず貧弱な作りの家で昔の軒の高い思い出が消えてしまったことや、生家のまえの大通りが思いもかけず狭かったことなど。

「わしもさ。君がいなくなっただけからはあんなところへ行くこともない。それでしばらくして

から行って見るとどうも違うだよ。君もそうか。昔のことはみんなそうかなあ」

友達の話が出た。Aも死んだ。Bも死んだ。Cは流職とくしよくで牢屋にはいつてから、出たあとの行方は不明だ。悪い話ばかりである。

「興吉が戦死したね」

自分は今途中で興吉の家によって来たことを話した。

「うん。あれはずっと前だ。南京攻略の時だからね。わしが行ったのとは別だ。わしは本籍の方で出征したからな」

「和尚も軍隊へはいったのか」

「はいったのかつて、君、わしは甲種だよ」

「そうだったか。知らなかった。何時出征したんだい」

「二度出たよ。上海事変と××攻略の時だから」

「ふうん。それで病気になって戻ってきたのかい」

「いや、帰還してからだ。戻ってから色々なごたごたがあつて、身体不相応な動かし方で使ったのだよ」

「勿論、一年志願兵だったろうが、位は上がったかい」

「中尉になったさ」

和尚は事もなげに言った。

自分には意外なことばかりだった。和尚と軍隊とはどうしても結び付けそうもなかった。一体に当りの柔らかい、悪く言えばしまりのないような態度は昔からの性質であった。

和尚は寝て団扇を動かしながら、上海のことなどを話した。自分は話をききながら、和

尚の後方の鴨居の上にかけてある額に入れた小さいスケッチ風の墨絵を眺めた。風景で、筆法は南画であるが構図は純然たる西洋画である。変に瑞々しく不思議な感じだ。絵の真ん中に見えるのはここへ来る途中でも懐かしく眺めて来た臥牛山、田圃の手前にある唐黍が近景になっている。

庭の方に多勢で砂利を踏む音が近付いて来た。和尚は首を上げた。自分は立上りながら尚も絵を眺めて、

「あれは誰が描いたんだい」

「わしだよ。一寸待ってくれよ。お経を上げて来るから」

和尚はゆっくり起き上がって奥へはいった。やって来た五、六人の男女は衣を着て出て行った和尚を迎えて、そのまま墓場の方へ廻って行った。座敷の裏の窓から墓場の方をのぞくと、墓に花を活けている男女の後方で、和尚は傍の墓の頭に手をかけながら、退儀そうに立っている。立っているのがやつのようだ。やがて経がはじまる。その声は案外しっかりしていて底の固いものがあつた。私は遠くのお経をききながら臥牛山の絵が和尚の手になったと言うのが珍しく、じつと額を眺めていた。人々は経を終えてから本堂にお参りをしたが、和尚が病気のことはよく承知していると見えて、口々に見舞いの言葉を述べて、すぐ引き揚げて行った。和尚は奥の間で衣を退儀そうに脱いで捨てた。脱いで行くあとから夫人がそれを畳んで行った。

自分はやってきた和尚に向ってこちらからすすんで寝転びながら話しかけた。

「何時の間に習ったんだ」

「絵か。そうだなあ君あ、知らないらよ。嶽堂さん、知ってるか」

「ああ、あの絵描きか。知ってるどころじゃあない」

子供の頃、嶽堂と言って旅回りの南画の絵師で、この土地に割合に馴染んでいた人があった。亡父なども近所の物好きを集めて、嶽堂に教えてもらっていた事があった。馬や朝顔を半紙に何枚も、座敷一杯に拡げて描いて騒いでいたことを思い出す。嶽堂は記憶では半白の山羊髯を生やした小さい男でいつも羽織袴をつけていた。

「嶽堂さんはこの座敷で死んだんだ。長い間この寺にいて居候していたよ。死んだのは七十一だったか。まだここの親父が生きていた頃だ」

「へえ、嶽堂さんがこの寺にね。まるで狩野天信みたいだな。今にあの下手くそな松の絵にも素晴らしい値が出るか」

「絵は不味いなあ。ちっと教わって見たがあれじゃ弟子の方で厭きてしまう。あとは我流だよ」

「矢っ張り馬なんか描いたかい」

「いや馬は描かなかったが、我流でやりだしてからは、写生ばかりやった。これが一番ええ方法だろうと思ってるな」

和尚は妻女に、絵のはいった箱を持って来させた。石や木の基本的なものを描いたのが沢山出て来た。和尚は首を傾けながら言う。

「写生って言うが、東洋画で言う写生と言うのは油絵やデッサンとはまるで違うな。何枚も何枚も写生した揚句に今度は空で物を見ないで最後の絵を描く。最後の絵と言っても、これがまた何枚も何枚も出来る。版画みたいにさ。だから何だな。筆勢なんでもものが主に
なっ
て来るんだな。西洋画は一枚の絵をいつまでも弄いじって写生から仕上げまでしてしまう」

「だけどその鴨居の絵ね、臥牛山だろう」

「うん、そうだ」

「その絵の構図なんかあ、南画にはない図だぜ」

「ないだろう。何処にもないよ。大体がそんなこと考えてやしない。気に入った物をいい加減に描いたって言うだけだよ」

「気に入る最後のものは臥牛山か」

「うん。いろいろなところを描いて見たが、この辺じゃあ、あの山が矢張り景色の中心だなあ」

「そうだろう。そうだろう。実を言うと僕も遠く離れていて思い出す最初の景色はあの山だ。夢にもよく見た」

「うん」

和尚は臥牛山の写生の絵を何枚も出した。画帳にも一杯描いてある。私はそれを眺めて、「あるなあ。随分やったな。僕もあの山は好きだ。何処にいたって見えるようだ。夢に見ると言ったが夢もね、苦しい事が連続して、疲労困憊した時によく見るんだよ。何処かへ逃げ込みたくなるように気の弱っているのを迎えてくれて、迎えると言うよりは受けとめて、そして力強く押し返してくれるような気持ちだ」

掘げられた沢山の臥牛山の絵の連続が、自分にはそのまま虫か何かの複眼に映る幻影のように見えた。

「離れるとなあ、そうずらよ」

和尚は点首うなずいた。

「だけど、絵も描かないでぼんやり毎日見てるぶんには、こんなつまらない山もない。臥牛山はまだ格好がついているからまだええ。他の山ときたら。野原だって、海岸だってさ。白砂青松なんて薬にしたくもない。何もなし。砂利の浜の荒海って言うだけだ。もつとええ景色だったらどんなに気持ちがあええかと思う。景色だなんて言葉あ使いたかあないくらいにつまらない。だけえが、写生をすると、その感じが違って来る。まるでとは言わないが、とに角違って来る。新しい感じだよ」

「うん」

「それが絵と言うものの功德だと、わしは思う」

「うん」

「しかし、なあ。田舎の景色を一眼見て、いいなあと感歎するなあ、都会人の眼だよ。この眼は二、三日すりゃあすぐ馴れちゃって、何とも思わなくなっちゃう眼だにの。それをはじめから長い間見馴れて来ていて、ただ厭き厭きするだけで他には何とも思わないでいるような、このまわりの実に平凡な景色をさ、急に新しい眼で見直すのは、こりや相当な修業だよ」

「うん」

寝ている位置から庭を見ていると上がりかまこ框の上に牝鶏が首だけ見えて歩いて来た。雛子を連れてくるらしく騒々しいが、どうも鳴き声が違うので起き上がって見ると、家鴨の雛が十羽ばかり牝鶏の足下にいた。庭の築山の苔をついたり、砂利の間を掘ったりしている。あの不粋な吻（嘴）はすでに争われない形をしているが、黄色い羽毛は産毛のようにふわわりとして美しい。中には毛の先だけがかすかに墨ぼかしを入れたようになっていた。

動作も鶏の雛に比べると少し悠長である。

「この家鴨の子はその牝鶏がかえしたのだよ。いまだにああして、自分の子だと思ってるから妙だ」

妻女が牝鶏に餌をやると家鴨の雛がよつてたかつてみな食べてしまった。親鳥を自任している牝鶏はそれを守るようにして、遠くからコツ、コツと呟いているだけである。雛共は食べてしまふと思ひ思ひに散つて、庭石の上とか、木の下だとか平らなところを選んでうづくまつた。しばらくすると一様に動かなく静かになつてしまつた。

しばらく見ていると、小家鴨達の丸い眼が白い瞼を狭めて細くなる。閉じてしまふとそれまで如何にも坐りのよさそうに石にのつていた者が、迂るように前へのめり出す。中には体が横へ舟のゆれるように傾くものもある。小家鴨達はてんでに舟を漕いでいる。和尚は面白くて堪らないようにニコニコ見ていたが、

「家鴨を写生したのがあつたよ。何処だったかな。最近だ」

持出した箱の中にはなくて、奥の箆笥の上から持つて来た。出して来たのは家鴨の雛を五羽ばかり描いてあつた。私はその家鴨の表情と和尚の顔とを見比べて不意に可笑しくなつて、大声で笑い出した。その声に小家鴨達は一斉に昼寝から起き上がり、牝鶏は警戒の声を挙げた。

「ええ？」

「おかしいぜこれ」

「何だい」

「この家鴨はみな和尚の顔に似てるぜ」

和尚はニヤニヤしながら自分の手許をのぞき込んだ。自画像はなかなか自分に似せるのは難しいものだと言う。これは自惚れとか自己の顔貌上の欠点を埋めたい願望が筆を鈍らせるのだ。それでいて自己の顔の印象は自らに対して何よりも強いと見えて、他人を描けばそれが自分の顔に似て来る。他人の顔ばかりではない。死物の石や木の肌にさえ自己の顔貌上の特徴が出ると言われている。

嘘か本当か知らないが、兎に角、この家鴨の顔が和尚に似ていることは確かだ。

和尚は絵を手にとって眺めながら、

「そうかなあ」

とまだ余りよくは納得出来ない顔付でニヤニヤしている。

「和尚さん、また絵か」

そう言つて家鴨の雛を追い散らして、ずかずか入つて来た男がある。それは自分も昔知つていた石屋の倅で徳と言う男であつた。昔はいい若い衆だったが、今では少し禿げかかつて来ている。倅といつても、今ではもうちゃんとした主人だろう。顔付や体の頑丈な元氣なところは少しも變つていない。彼は自分を見ると吃驚して眼を見張つた。

「やあ、こりゃ」

何時こちらへ、何で、何時までこっちに泊まつてと言う質問が矢継ぎ早に出た。切り込むような調子は昔の通りだ。昔、彼はこの界限で鳴らした不良少年で、自分の家に使つてゐる職人たちを率いて、近町隣村の不良青少年達を震え上がらせていた。こちらは小さい子供の事で喧嘩の原因などは一つも判らなかつたが、喧嘩の最中の有様はよく見て知つてゐる。川端の土堤で、日暮れ時に四、五人の大きな体の男を相手に、自転車のチェーンを

振り回していたこともあった。両群が殺気立って対峙している時、真っ先に隼のように突っ込んで行くのも彼だった。何時かは、道路工事のトロツコに、手下と一緒に乗り込んで、急勾配の坂を何か激しく叫びながら、物凄い勢いで隣村の方へ走らせて行く光景を見た事がある。隣村の地藏尊の開帳に来たサーカスの芸人と悶着を起した時であった。警察に挙げられたのも数えられる程ではない。今は性格がどんな風に変わったか知らないが、いま長めの袖の襦袢をきている下には、確か上膊から背中へかけて、桜の木の入墨が黒と白粉でしてある筈である。酒を呑むと白粉でした桜の花が白く出るのが得意だった。

石屋は私に向って母や兄のことを訊ね終わると、和尚の方を向いて墓石の話 시작했다。この用事で来たものらしい。彼は、戦死者の墓の規格を作ったらどうだと言うのである。

「そりゃあ、誰だって死なれた身になりゃあ、立派な墓あ作りたいのは人情だ。だけえが、みんなして、花崗岩だ、何だと言って、二千円ずつも張り込んだ日にゃあ、一体どうなる。ええ？和尚さん」

「そりゃあ、そうさ」

「こつちは儲かるよ、高けりゃあ高いほど儲かるさ。お寺だってそうだ。墓が立派なら、お布施もそれにつれて多くなる。和尚さんだからあけすけに言うけえが、そうずら？しかし、そうかって言って、みんなの言う通りにしていたら、どうなる。そう思うと」

「どうも不可んな。大体そう言う事は寺の和尚が遺族によく言っけさせなくちやよくないよ。互いに引き締めたものにしていてもらわないと、どうしても競争になる。華美と言うのはこう言うところから来る。遺族と言うものは今では立派な家族の見本と言うことだよ。だから質素に、地味に物事をやるのも、矢張りその見本になってもらわねばならん

よ」

「今も、注文があつて實際考えた」

「そうだよ。そう言う石屋が一軒でも多くなつてくれるとええ。此処だつて、裏の墓場を見てもそうさ。亡くなつた親父も、もうちつと考えてくりやあ、こんなに見つともないごたごたした墓場にやあならなかつた。こんな狭いところへまるで野っ原へでも建てるような石塔だ。石碑だ。墓と墓の間に五寸の隙も無い。大きいのと信者が競争するのを、親父は望み放題にさせていただなあ。こいつは不可んよ」

「まあ、先住さんはね、考えがあつたはずらけえが、今は今のやり方がある。どうだ。和尚さん。和尚さんの絵心で一つ素晴らしい下図を作つて、それを規格にするように町中で決めたら！」

「はは。それもええ。だけえが、わしはこのあたりのお寺には憎まれ者だでなあ」
「かまうもんか。ええものあええ。和尚でなけりやあ出来ない」

石屋は私に向つて、和尚が三度目に戦地から帰つて来て、出征中に亡くなつた先住の葬式をした時の話をした。

「この辺の、金持のお寺さんち、三十人ばかり招ばれたさ。何しろこのお寺あ古いし、先住さんがどつちかつて言うど政治家だったので、みんなさぞ立派なものをやると思つて集まつたさ。そうしたら何から何まで思い切つて簡単にして、お供物は返すし、お齋のとき、三十銭の海苔巻を一人ずつくばつて、これで終わりさ。そんな時、年寄りのえれえ和尚さん達を前において、これからの日本は食い物を大切にしなければりやあ駄目だつて話を一くさりやつた——。俺あ、きつい事すると思つた」

「あの時から、えれえ仲間外しさ。異端者さ。徳さん、お前もそうだよ」

「俺なんかどうでもええさ。だけえが、あの時あ先住さん遺^のこし物もあるって、みんな思ってたし」

「たんともなかったが、みんな婆さんが実家へ戻る時、つけてやってしまったよ」

「それから、和尚さんが凱旋する時の評判で大したものだったからなあ。金はあるし、評判の勇士だしってとこで、お寺さんちは期待したさ。何しろ金鵝勲章をもらった中尉だつてんで、ここの新聞じゃあ一週間も××攻略の記事を連載する始末だったでさ」

「金鵝勲章？」

私は吃驚して寝ている和尚の顔を見た。

「××攻略の時、敵の後ろへはいつて、五倍の敵を破って将校を二人捕虜にしたんだ。凄えんだ。このニヤニヤした和尚さんの、何処にそんなところがあるのかと思うよ」

「へええ。そうか。和尚、どうしてそれを早く話してくれないんだ」

「どうしてって。別に隠すわけでもないが、話の風向きさ。何やあおいても君の顔を見たらその話をするって程、眼の前にぶら下がっているほどのものでもない」

「そうか。だが徳さん、あんたの方の話みたいだ」

「ううう」

石屋は急に獣のように唸って腕をさすった。和尚は肘枕をしたまま、ニヤニヤして見ている。

「お寺さんちにやあ憎まれるけえが、在郷軍人じゃあ凄えんだ。軍人会の幹事連が、みんな和尚さんじゃあ、ぴりぴりしてるんだ。何時もはこんな風にしなしなしして、軍服も

似合わないくらいだが、言う時になると実際思い切ってズバリとやる。みんな顔色を変えちゃうよ。俺も第二国民兵の教育をやったが、俺も和尚さんの話をきいていると時々、体が冷たくなることがあった」

和尚は眼をつむっていたが、それをきいて笑い出した。

「俺あ、腹を立てると手が早いが、和尚さんのは気持が強えんだなあ。だけえが、最近の未教育兵の教育じゃあ、随分と和尚さんは働いただよ」

石屋は和尚の笑っている蒼い顔を見ながらいたわるような調子で言った。

和尚の体に気兼ねしながら話をしたが、それからそれへと話が長くなり、とうとう日が暮れてしまった。私は近くの料理屋へ案内してくれないかと言うと、和尚は手を振って、この辺の料理屋では碌なことはない、それよりも、と言って子供達を肴買いに走らせた。それで夕飯を馳走になってしまった。

私が暇を告げて立上ったのは八時頃だった。隣り町の私の宿へ帰るには汽車に乗らなければならなかった。私は逡巡^{まよ}っていたが思い切って言った。

「和尚。あの臥牛山の絵をくれないか」

「ああ」

和尚は簡単に点首^{うなず}いて妻に外させた。新聞紙に丸く包んだのを貰って、私は縁^{ふち}から下りた。和尚は門まで送ってきた。

「今度何時来る」

「判らない。あくせくした生活だ。情けないが先のことは決められないんだ。しかし近いうちにまた来たい」

「来たら真っ先によっとくれ」

私は和尚に別れを告げて、暗い田舎町の道を停車場へ向かった。脇の下に挟んだ絵のことを考えると、和尚がその絵のうまい不味いを私に問うたりする気配の少しも見えないのが、私に気に入った。絵そのものも、そういう是非を超越した味と魅力をもっていた。これはきっと私の東京にある生活を浄化するものに違いない。